

Date

群馬は古墳人がすごいぞ!! 群馬で歴史的大発見

〈このテーマにしたきっかけ〉

○去年の東国文化自由研究では、「古墳がすごいぞ!! 群馬県」というテーマで、古墳や埴輪の基礎知識などを調べ学びました。しかし、今回は「古墳人」という全く違う所に着眼しました。理由は、群馬県で「鎧を着た古墳人」が発見されたことを、TVや、本などで、目にしたからです。この研究を通し、「古墳人」のことをよく知り、群馬で発見された鎧を着た古墳人のどこが歴史的大発見なのかを調べたいと思います。

〈古墳人とは?〉

○日本の古墳時代(3世紀後半から7世紀)に生存していた人々のこと。おもに古墳や横穴(横穴墓)から発掘される人骨に基づいて形質が調べられている。身長は現代を除いて最も高く(男160cm強)、顔は比較的扁平で鼻は高くない。眉骨の発達も強くないが、頬骨が発達し顔全体としては元顔強である。一般的に弥生時代人(弥生人)からのちの歴史時代人への一連の形質変化の中間的段階を示している。(コバン「古墳時代人とは」より)

〈古墳人の顔を知るために - 復顔〉

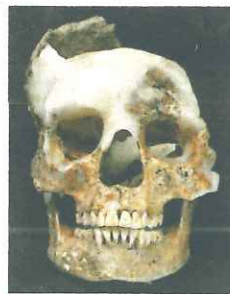
○「復顔」というのは、頭の骨の複製品に粘土で肉付けをして生前の顔を復元するもの。



【頭骨】



【復顔像】



【頭骨】



【復顔像】

甲を着た古墳人

首飾りの古墳人

○「甲を着た古墳人」(40歳代男性)は顔の形や目鼻立ちが朝鮮半島の人によく似ていることから、「先祖のふるさは朝鮮半島のと」かた」と推測される。

○「首飾りの古墳人」(20~30歳代女性)も復顔をしたところ、代々この地域で暮らしているような生粋の地元人であることがわかった。

(東国文化副読本より)

〈朝鮮半島から日本にやってきた渡来人なのか?〉

○僕は、もしかして、朝鮮半島の人によく似ているということは、渡来人なのではないかと思う。渡来人が「古土甕づくりの技術」などを伝えるために、日本に来たが、だんだんと年月がたつにつれ、古土甕人という呼び名にかわったのだと思った。僕は気になり、朝鮮半島の人々(渡来人)について、調べて古土甕人は渡来人であるということが、成り立つかどうか、調べてみました。

<渡来人について>

◦古代に中国や朝鮮半島から日本に渡来した人々、およびその子孫。縄文時代ないし弥生時代にはすでに大陸から日本へ渡来した人々がいたことがうかがえる。また、平安時代以降も大陸から日本に渡ってきた人々はいいたが、歴史上特に重要な意味をもつのは4世紀末から7世紀後半に多く住した渡来人である。渡来人は、五経博士による儒教や易、医学、暦などの学問、須恵器の製法や機織りなどの技術、古墳づくりの技術などの文化を日本に伝えた。(コトバンク「渡来人」より)

<須恵器について>

左のスケッチを見てもらうとわかる通り、須恵器の技術はとても高い。須恵器とは、古墳時代中期(5世紀初頭)に朝鮮半島から伝わった青灰色をした硬い土器のことである。



群馬歴史博物館へ行ったときの実写のスケッチ

<朝鮮半島の人々の移住について>

◦さきほど、朝鮮半島の人々の移住に、古墳人が似ていると言及したが、渡来人のルートを参考にして、言及していきたいと思います。



左の図をみてください。この図からわかる通り、吾妻馬場にも渡来人が入ってきているのかわかります。そして、縄文型と弥生系渡来人型の間とみよろ遺伝子系統の地域にも入っていますから、充分古土着人=渡来人ということもありえるでしょう。しかし、僕が「気になったことは、アイヌ(後の北海道)や琉球(後の沖縄)は、渡来人が入ってきていないことがうかがえます。なぜ、この地域には、縄文型しかないのか、推測してみました。

(livedoor.blogimg.jp)

<アイヌと琉球は、特別だったためなのか?>

◦アイヌと琉球は、江戸時代になっても、あまり「日本の国」としては認められなかったため、この時代でもやはりアイヌと琉球は特別な存在だったといえるでしょう。そこである2つの説をたててみました。

- ① アイヌと琉球は、当時文化が発達していなくて、渡来人が行かないという判断をしたため。
 - ② アイヌと琉球は、渡来人の敵となる人が住んでいたため。
- この2つの説は、当たっているかわからないが、自分で「解き明かしてみたいです。」

<朝鮮半島の人々が古墳を伝えた、確かな証拠>

○僕は、さきほど渡来人は古墳づくりなどの技術を伝えたといっていたが、果たして、本当に、朝鮮半島から古墳が伝わってきたのかを言ってみよう。

<朝鮮半島にも古墳があった>

○朝鮮半島西南部の栄山江流域では、日本列島に特徴的な前方後円墳の土葬形を持つ、10数基の古墳の存在が知られる？なぜこんなところに？～あつたの言説～



①朝鮮半島西南部の栄山江流域は、ヤマト政権の支配下にあったのか？

②朝鮮半島西南部の栄山江流域は、倭の一部だった？

(異形の古墳、著者：高田賢太より)

僕の予想

○僕は①のほうだと思う。理由は、昔、栄山城流域は元々、朝鮮半島の人々が住んでいて、しかし、当時勢力があつた大和(ヤマト)政権の人々が、占領し、そこに住んでいたヤマト政権の偉い人が死んでしまったから、前方後円墳が作られたと思う。

<古墳人の精密な技術>

○このテーマにした理由は、はじめての国宝埴輪の「鎧甲の武人」がとても精巧に表現されているからである。



○左の絵を見て下さい。これは、群馬県太田市から出土した、「鎧甲の武人」だ。武士埴輪の全身像で、高さは1.3mもあり、6世紀後半に造られた非常に精巧な埴輪だ。甲冑を身にまとい、大刀と弓を持っている。同じような埴輪は、県東部を中心に複数出土していて、国指定重要文化財となっているものもあるが、その中でも、この埴輪は、特に細部まで丁寧に表現され、美術的にも評価が高いものである。(東国文化副読本より)

<この埴輪から読み取る僕の予想>

○このような精巧な技術をもっているということは、もし渡来人の子孫などがつくれたとしたら、家族代々受けつぐ、技術なのかもしれない。ということ、やはり、古墳人は、渡来人の子孫なのか？それとも、渡来人自身なのか？そのような予想がたてられました。しかもこれは、はじめての国宝埴輪で、しかも群馬県産!!群馬には、すごい技術者たちがたくさんあつたのだと思う。すごい一言。

Date

No.

<古墳時代の人々の暮らし>

交通手段

<馬が重要な交通手段だった〜群馬県〜>

①。ここでは、少し群馬の埴輪についてふれていきたいと思う。交通手段で、群馬特有のものには馬がある。群馬県内で出土した馬形埴輪は450例以上といわれ、全国的に見ても非常に豊富な数量を誇る。5世紀中頃の人物・動物埴輪の登場から6世紀末まで、人物埴輪の横には、馬の埴輪が置かれることが多かった。他の動物と比較しても馬の埴輪は圧倒的に多く、その数は動物埴輪全体の90%以上をしめる。<東国大化副言語本より>

<馬は、交通手段でなく、権威を示す飾りだった？>

②。古墳時代の遺跡からは馬具を装着した馬の埴輪も出土していますが、当時馬を所有し乗っていたのは一族の首長など、限られた立場のものだけでした。軍事利用が主であった点では海外とそれほど変わらないが、日本における馬は単に戦力としてではなく、国カヤ主長の権威を示す飾りにすぎません

↓ 疑問か

<Transformationより>

③。この①、②の文章をみて、僕は、①をみたときに、農耕や輸送または、単に戦国時代のように戦闘などに使っていたと予想したが、②は、国カヤ主長の権威を示す「飾り」と言っている、より詳しく調べ、最後に、こういったことがいえるか、予想をもう一度立て直してみたいです。

↓ 手かかり①

<群馬は、馬がいたからこそ、陸の道が発達した>

下の写真をみてほしい。これは、馬に乗る盛装男子という名の土直車輪だ。これをみたらわかる通り、馬が必用とされていた時代ということがわかる。群馬には、5世紀後半に、馬が伝わり、軍事・輸送・農耕などの手段としてたいへん貴重であり、その普及とともに陸上交通が重視され、山や川を越えていく「陸の道」が整備されていたのである。畿内から見ると、群馬県は東国、そして広大な関東平野の入口にあたる交通の要地だったのだ」と文献に、書いてある。



<東国大化副言語本より>

この段階では、馬は、輸送のためにつかわれたと思われる。

<馬はどうやって、群馬に来たの？>

○邪馬大國の女王・卑弥子のことが記されている3世紀ころの中国の歴史書には、日本には馬や牛はいないと記されている。

5世紀になって、渡来人(もしかしてお墳人?)とともに大陸から日本にやってきたと考えられており、馬は、まずは当時の政治の中心地であつた近畿地方に伝えられた。群馬の地域は、この頃すでに、全国でも屈指の有力地域だったので、近畿地方に馬が伝わってほどなく、5世紀後半には伝えられたと推測できる。

<東国大化副言語本より>

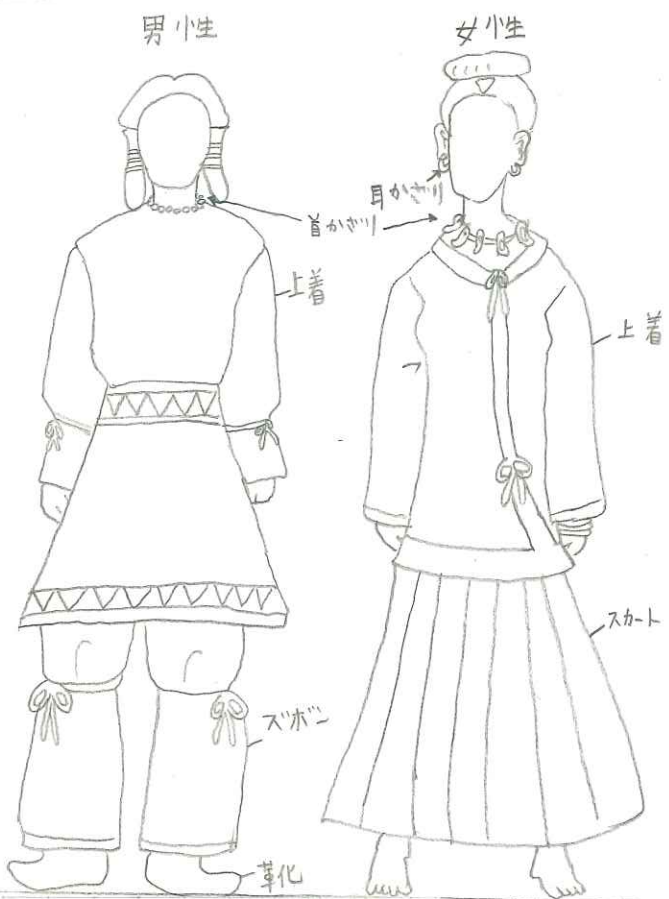
↓

僕は、赤線のことか気になりました。しかし、よく考えてみると、群馬は古土産がたいん作りられていて、たぶん、王や、偉い人がいたことがわかり、納得ができました。

衣服

〈どんな服を着ていたの?〉

5世紀の終わり頃、人物埴輪が登場します。その埴輪をみると、男性はズボンと上着、靴もはいている。女性はスカートと上着です。弥生時代の服装とは、ずいぶん変わった。



〈高級な絹織物〉

古墳時代中期になると、朝鮮半島から、より高級な織物をつくる機織具が伝わってきた。これを使えば、幅60cmほどの布がでる。しかし、この機織具は有力者のための布を織るときだけに使われていて、一般的には、弥生時代と同じ道具を使っていたと考えられている。

(?)僕は、アワセサリー(首かざり、耳かざり)を、男女がつけていることに、少し現代とは違うな。と疑問に思い、調べてみることにしました。

〈原因は、身分の違いから?〉

人物埴輪を見ると、玉を連ねた首かざりや耳かざり、うで輪は、女性も男性もつけています。足輪

(男性と女性の衣服のちがいの様子を絵にした絵)も、実は、男性、女性両方しています。縄文時代や弥生時代には、男女でアワセサリーに違いがありました。が、古墳時代には違いはなさそうです。男女よりも身分の違いの方が重要だったのかもしれない。



首飾りをつけた男性



アワセサリーをつけた女性

この2つは、なんと、群馬県の大田市から出土したんだ!! 群馬にも、この古墳時代の特有の文化があったことなどがわかるね!! 群馬はすごい!!

↑ 塚廻り古墳群3号墳出土

↑ 塚廻り古墳群3号墳出土

(全国どこも考古学教室より)

住居

〈榛名山の墳火のおかげで歴史的大発見!! ~群馬県~〉

○上も三山の一つ榛名山では、6世紀に2度の大墳火があり、麓の広い範囲は当時の先進技術であった馬生産や金属加工などの姿、人々の生活の様子がそのまま山灰などに覆われ、奇跡的な地域となる。その中でも今回は、住居の大発見などを調べていきたい。

〈世紀の大発見がたくさん!!〉

○まず、ここでは、茨川市の黒井峯遺跡についてふれるので、事前に、テーマなどを集めたいと思う。

〈日本のホンヤイ!! 黒井峯遺跡〉



○左の写真を見てほしい。これは発掘調査中の黒井峯遺跡と、その後30に見えるのが、榛名山です。僕は、写真を見た時に、「こんなに山が遠いのに、山灰で村が覆われてしまうほどになるんだ」ととても驚きました。これは僕の考えですが、ここに住んでいた古墳人は、

みんな痛くて、辛い思いをしたと思います。さて、この遺跡は、2つの大発見ポイントがあります。

〈大発見① ~古墳時代の稲穂がそのまま発見!!~〉



○左の写真は、なんと古墳時代の稲穂だ!! 昭和63年、建物内部で逆さまになった高杯を取りあげた時、1550年前に閉ざされた稲穂が鮮やかな色のまま出てきたが、あという間に変色してしまった。しかし、古墳時代にも稲作があったことがわかるし、又、古墳時代の保存の技術もわかるので、個人的には、すごいな、と思いました。

驚き!!

○僕は特に、 のところに驚いた。理由は、1550年前の稲穂が、高杯に入っていただけなのに、こんなに長くもたせ続けることができたという事実を知ったからだ。(僕の家のは、けこうすると腐ってしまいます!!)

〈大発見② ~平地建物の発見〉



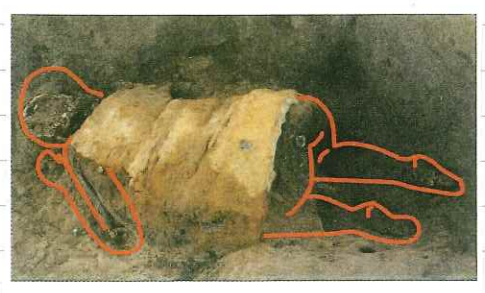
○左の写真は平地建物である。黒井峯遺跡が「発見されるまでは、古墳時代の住居は「堅穴住居」と考えられていたが、この遺跡では、地面を掘りくほめない、平地建物を多数発見し、当時の住まいのあり方を考え直すきっかけとなった。

驚き!!

○僕は特に、 のところに驚いた。理由は、この時代、現代よりは、基礎も甘く、弱い建物だったかもしれないが、穴を掘らず、平地に家を建てようというアイデアがあったが、この時代に生み出されるということは、すごいことだ、と思いました。

<甲を着た古墳人で大発見!! ~群馬県~>

古墳人について理解を深められたので、次はこのテーマにもなっている「甲を着た古墳人」について調べたいと思う。



左の写真を見てもらいたい。これは、「甲を着た古墳人」だ。うつぶせに倒れているのがよくわかる。これは8年前、榛名山のふもとの渋川市金井の金井東墓遺跡で見つかったものだ。

<甲について>

この古墳人は、甲を身にまとっているが、どのような甲になっているのか

(東国文化副読本より) になって、調べてみました。(一部文章 朝日新聞引用)

<甲は高度な技術。その姿から想像される古墳人の気持ち(行動)>



甲は、小さな鉄の板(小札)180枚を絹糸の組みひもでつなぎ合わせた当時の最新技術だった。人骨の下には胃(かばと)もあった(上の写真参照)。別の甲も巻いた状態で発見され、さらに中にある鹿の角で作られた小札の発見も国内初。金銀と鹿角で作った矛も発掘。人骨は40代の男性で身長は164cmと推定された。渡来系の特徴があった。

(東国文化副読本より) 男性は榛名山の方に向

かってひざをつき、うつぶせに倒れていた。山の神に祈っていたのか、戦いを挑む姿をみせて、邪を払おうとしていたのか。発掘調査をした群馬県埋蔵文化財調査事業団の杉山秀宏・上席調査研究員は、発掘状況や遺物から、「厄を避ける儀式を行おうとしていた可能性がある。
(朝日新聞デジタルより)

<僕の二二までの意見>

僕は赤線のところに注目しました。この人は、とても勇敢な人だと思いました。普通は榛名山のほうを向かず、逆の方向を向いて逃げますが、自ら立ち向かっていくなんて、普通はできないことです。このような姿になっているということは、逃げようとしただけ、などというだけでは考えられません。確かに僕も、前のところで予想をしましたが、この記事の人とも同じ考えですが、違うかもしれません。もしかしたら、逃げる方向をまちがえてしまったなどという二二もあるかもしれません。なので僕は、ある一つの説を立ててみました。

①この人は胃をとってひざをついていたということは、例えば山などを大切にしていなくて、山の神を怒らせたと思い、服従の態度を示した。などということも考えられるかもしれませんが、この二二が、将来、研究などで解明できる二二です。

<黒井峯遺跡で、世紀の大発見が!!>

○渋川市の黒井峯遺跡は、6世紀中頃に起こった2度目の噴火で土埋めされた。2Mも積もった軽石の下に当時の集落が残されていて、普通の遺跡では発掘することができない、住居の屋根の曲がりなどが発見され、古墳時代の集落像を一変させた。住まいについても様々で、堅穴住居のほか、平地建物、高床倉庫など"建物"を目的によって使い分けていたことがわかった。こうした建物のまわりには垣根がめぐらされ、その周りからは、庭や畠、それらをつないでいた道や、家畜小屋の跡が発見されている。以下は、黒井峯遺跡の写真である(一部VRで再現した写真)



発掘当時の黒井峯遺跡



軽石でつぶされた堅穴住居跡



VRで再現した黒井峯遺跡の様子
(東国文化副読本より)

僕は、垣根がめぐらされていると聞き、古墳時代にも戦があったことを改めて自覚しました。戦があり、家畜小屋があるということは、やはり、馬は、軍事などに使われていたのか?

<東国文化副読本の動画を見て〜黒井峯遺跡〜>

○この動画を見て、黒井峯遺跡が、国指定史跡になっているほどすごい遺跡だということがわかった。この遺跡の住居は、かやでできているため、すぐにくちはてしてしまうとらていたが、奇跡的に、山灰が積もって、残されていたといっていたので、本当に「古墳時代を象徴する遺跡」なんだと思いました!!

<次に言及することの予想>

次に、「甲を著した古墳人」について言及するのが、予想をたてたと思う。まず、甲ということは、この時代には戦があり、さらに、村を守る、見張り役というものがあつたのかも、などということが想像できる。又、僕は一度、TVでその古墳人を見たことがあるが、うつぶせになりながら骨になっていました。恐らく、これは僕の想像ですが、まさかこようとは思ってなかったか、まさか噴火して、逃げろのに必死だったのだと、僕は思う。それか、もしかして、噴火により飛んできた石などを敵だと思いい、村の人々を守るために戦おうとしたか、死んでしまったのかもかもしれません。どちらにしても、次のページから、「甲を著した古墳人」について、より深く理解できるようにしたいです!!

<甲を着た古墳人の近くには他の人骨も>

この金井裏遺跡からは、甲を着た古墳人の他に、生後1年に満たない乳児の頭の骨と別の胴部の鏝一点、しかも矢尻が十本も見つかっている。

<4体目人骨は乳児>

(2012年(平成24)年 土曜新聞より)



左の写真を見て下さい。これは金井裏遺跡の火山灰層から見つかった4体目の人骨で「乳児の頭の骨です。事業団体によると、甲を着けた男性の骨の北西約30メートルで、うつぶせの頭と右足の一部が見つかった。4~5歳とみられ、性別は不明。同遺跡では、乳児と女性の骨も出土しており、同事業団は幅広い年代の男女が生活し、同じ噴火で被災した状況がみえてきた」としている。

また、甲の男性の近くで見つかった古墳の中央に、二人分の埋葬跡があることが明らかになった。剣や勾玉が発掘されたが、骨は残っていない。(写真、大塚：SHIKOKU NEWSより)



埋葬施設全景



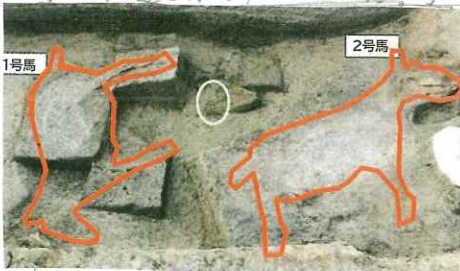
1号埋葬施設の出土品



2号埋葬施設の出土品

<金井遺跡群からは馬も出土!!>

(写真：心に「馬」と群馬県より)



左の写真は、馬骨です。この馬骨が発見されたことにより、馬の飼育が行われていたことが判明した。火砕流に襲われた馬が2頭発見され、一頭は仔馬、もう一頭は繁殖可能である此馬である。このことから、もう一度いって、この地で繁殖飼育が行われていたことがわかる。

<この金井遺跡群のことを調べた感想や疑問>

(東洋新聞記者より)

僕は、この金井遺跡群を調べて、疑問に思ったことは、甲を着た古墳人と、乳児そして女性の距離が近いことだということ。僕は、この乳児と女性はそれぞれ甲を着た古墳人の、子ども、妻という関係なのではないかと思えます。又、矢尻が見つかっているということは、甲を着ているということと結び付けて考えると、やはり、この時代には戦があり、さらに深く考えると、この頃は、よく戦をし強かった村なのかもしれません。そのように感じた理由は、最新技術などは、弱々しいくらいにしか、強々ムラに伝わっていきからです。そして感想は、この木津山の墳火は、1500年前の当時の人々には、大変な被害がでましたが、現在の僕たちには、噴火があったからこそ昔の姿のまま地上に出てくれて、この噴火に、意味があることを、よくわかりました。

〈この自由研究を通しての感想〉

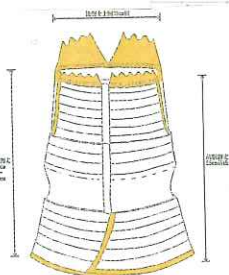
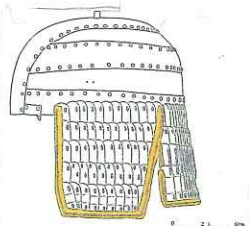
僕はこの東国文化自由研究を通し、古墳時代に生きていた「古墳人」について、知ることができました。特に僕は馬、という存在がこの時代、大きいものだったんだな。と思いました。馬は軍事、輸送、農耕なのかな、それとも王などの権威を示すためなのかなはまだ確実にわかりませんが、馬を尊ぶ



していたというのは事実です。又、今回の金井遺跡群などでも馬は見つかっていますし、確実に本当といえるでしょう。僕が一番驚いたのは、群馬にも古墳人がいたという証拠が骨になってあるということ。前ページでも説明しましたが、この古墳人や、乳児(それぞれ上、下)などがそのまま発掘されたのは、「噴火」が原因で起こった奇跡がもとです。これは僕の想像ですが、古墳人が、みざを曲げて、もし、山になにかをいの、ていたとしたら、山が150年後に発掘され、自分たちの存在が未来に伝わるという、羨望を与えたのかも



しれません。その事実はわかりませんが、その外、歴史の魅力であるとも感じました。一番下の写真を見て下さい。これは、前ページで説明した、1800枚もの小札というものを綴りあわせた「小札甲」と、胃ですが、僕はこれを見たとき、もしかして僕



【胃の復元図】



参考文南大(インターネットも含む)

- ・東国文化副読本、監修:松島榮治 発行:群馬県
- ・インターネット:コトバンク
- ・インターネット: livedoor、blogimg-jp
- ・異形の古墳。著者:高田賢太
- ・インターネット: Transformation
- ・インターネット: 全国子ども考古学教室
- ・インターネット: 朝日新聞デジタル
- ・インターネット: 上手新聞
- ・インターネット: SHIKOKU NEWS
- ・インターネット: 心は77番と群馬馬県